

[インタビュー] 現代社会とファッションの未来

東京大学名誉教授 見田宗介

[Summary]

“Interview: The future of contemporary society and fashion”

Munesuke MITA, Professor Emeritus, Tokyo University

We asked Mr. Munesuke Mita, a sociologist who has long examined today’s information- and consumption-oriented society through a sociological lens, about his overall perspective on contemporary society, centering on fashion. To open our conversation with him, we referenced one of his books, “Gendai Shakai no Riron (Theory of Modern Society). In the book, he raises two issues as external concerns of an information- and consumption-oriented society: environmental concerns (energy problems) and north-south divide concerns (poverty problems).

When looking at these issues from the standpoint of fashion, issues of drainage pollution, poor working conditions and low wages in developing countries are brought to the fore as significant social problems to be tackled. On the other hand, new initiatives have emerged, including the rise of an “ethical fashion” movement, the production of clothes using eco-friendly materials, and the creation of businesses that provide people in poverty with jobs and income.

These movements can be viewed as the consumption of a fashion phenomenon, rather than new development or a movement to the next stage in an information- and consumption-oriented society. In short, it may just be a manifestation of an external issue being incorporated as an internal issue. Prof. Mita defines this phenomenon using the term “re-internalization” and views these movements in a positive light. Or rather, he shows concern about taking a cynical or critical attitude to these developments. He argues that the emergence of ethical fashion, the improvement of working environments and the rise in wages are a matter of course under capitalism, and that such a movement should not be denied, whatever the motive.

Moreover, there is an internal issue involving fashion. It is the question whether effective developments can be brought about without material consumption in the fashion industry, where something new is always expected to be presented by introducing new modes one after another.

The recent trend toward simple fashion, as shown in Normcore, Effortless and Minimalist, may be a reflection of people's objections to the mode of updating continuously and infinitely to pursue novelty. Prof. Mita notes that it is interesting to see these movements. At the same time, however, he argues that such trends should be viewed over a long time span of several decades or a hundred years. He predicts that now that the fashion industry has just entered a stabilized phase of equilibrium after seeing continued growth in the 20th century, more earthy, minimal or simple trends will increasingly gain popularity, although there might be some swing-back.

What kind of future is in store for fashion? Until the 1980s, fashion was known for significant features that defined each era. After the 1990s, however, era-defining styles disappeared. Fashion that used to be clearly aligned in chronological order – from primitive to ancient, medieval, baroque, rococo, and modern – is now re-aligned horizontally, and any style can be chosen freely, transforming fashion from a diachronic phenomenon to one that is synchronic. Such freedom will pave the way to the fashion of the future. The rigidity of an era in which people desperately strive after novelty will come to an end, leading to a new era free from the pressure being always new.

『現代社会の理論』の背景

KCI：今回の研究誌『FashionTalks...』では「経済」をテーマとしています。ファッションはファッション・ショーをはじめとして、どこか煌びやかな、また儂い現象であるように捉えられがちですが、同時にビジネスあるいは産業であるという根底が確固としてあるように思います。今回は『現代社会の理論』（1996年）などの著作を通じて今日の情報化／消費化社会を見続けられており、2011年より『定本見田宗介著作集』・『定本真木悠介著作集』を刊行なされた見田宗介先生に、ファッションを含めた、現代社会の全体的な視座についてお話いただければと思います（Fig.1）。早速ですが、『現代社会の理論』はどのような歴史的背景、問題意識から筆をとられたのでしょうか。

見田：『現代社会の理論』を出版したのは冷戦が終わった後でした。つまりあの本の問題意識は冷戦時に存在していた枠組みが通用しなくなった後で、どのように現代社会を捉えるかということでした。20世紀は戦争と革命の世紀といわれ、2つの大戦、冷戦を入れると3つの大きな戦争がありました。そのなかで僕がとくに大事だと思うのは、3つ目の戦争つまり冷戦の終わり方です。これまでの戦争は勝敗を武力によって決していましたが、冷

戦は西側が武力によって勝利したわけではなく、要は東側と比べて西側の魅力が勝ったことに非常に大きなポイントがあると思います。いわば西側の社会のほうがそれだけ魅力的な社会だったのだと。

ではどうして西側は魅力的であり、勝利を取めたかということ、大きくいえば2つあると思います。まずひとつは根本的に自由な社会であるということですね。もちろん西側にも色々問題があるけれども、東側と比較するとはるかに自由な社会だったということです。もうひとつは資本主義の展開による情報化／消費化社会の豊かさですね。この情報化／消費化社会が本書のキーワードになっています。これまでの古い資本主義では約10年ごとに恐慌が生じており、その恐慌を避けようとすれば戦争をするしかないという、いわゆる「生産と消費の矛盾」という問題に直面していました。つまりこれまでは約10年経過すると生産が余って、マーケットに限界がくるから恐慌が起こる。それを避けようと思えば、人工的に消費をつくらなければならない。その一番良い手段が戦争なわけですね。これはマルクスが予言した通りで、だから社会主義の側からいえば資本主義は「死の商人」と呼ばれるわけです。

けれども西側はこの矛盾を情報消費社会化することで乗り越えた。それが西側に勝利をもたらしました。情報化／消費化社会とはデザインや広告、クレジットによって、人びとの欲望を喚起して人工的にマーケットを作り出す社会です。したがって現代社会の繁栄のなかでファッションとは大変重要な概念なのです。実際のシンボリックな例でいえば、GMによるフォードからの勝利ですね。フォードはT型フォードという非常に画一的かつ安価な大衆車を販売してマーケットを独占した。ところが堅牢でしかも安い車を作り過ぎたことによって、マーケットが飽和してしまう。そしてこの状況を打破したのがGMです。GMは今でいえば「2015年型の車とか2016年型の車」といったように、毎年デザインを変えていきました。つまり車は見かけで売れると。これは要するに車をファッション商品にしたということです。ファッションとはこれまで衣服に限定したものでしたが、それを車をはじめ、あらゆるものに全域化したということです。さまざまな商品がファッション化するという。それがいわば情報化／消費化社会の成功の要だったわけです。

『現代社会の理論』の現在

KCI：『現代社会の理論』の刊行より、20年の歳月が経過しています。この間に9.11やリーマンショック、そして東日本大震災などさまざまな出来事が起こりました。そこで現在

(2016年)から本書を振り返ってみて、先生ご自身がどのような感想を抱かれているのかお聞かせいただければと思います。

見田：この質問はわれわれの未来の社会と深く関係しているのですが、まず歴史には偶然的な要因と必然的な要因とがあり、みかけが大きい事件でもある種の偶然的な要因であまり歴史の本質とは関係ないような出来事もある一方、小さい事柄でも歴史の大きな動きに関係する出来事がある。それを見分けることが大変重要だと思います。そこで阪神淡路大震災やオウム事件、それから原発事故を除く東日本大震災はやや偶然的な出来事であって、それに対して本質的な出来事はやはりリーマンショックだと思います。

情報化／消費化社会は人びとの生物的な必要から離れて、いわば無限に欲望をかき立てることによってマーケットを無限化したことが成功の秘訣でした。つまり無限の消費によって、無限の生産が可能であると。ですがリーマンショックとは端的に言えば、情報化／消費化社会の永久にみえた無限空間のマーケットに限界があるということです。それは情報化／消費化社会の内部においてではなく、とくに環境問題や資源問題などの外部との間で矛盾が出てくる。そしてリーマンショックという象徴的な出来事は、さきのGMとトヨタを比較すると非常によく理解できます。先程情報化／消費化社会の好例として挙げたGMは、1927年にフォードから勝利した後、リーマンショックが生じるまでの約80年間、ほとんど情報化／消費化社会の王者だったといえます。ですがそのGMがリーマンショックの影響で債務超過に陥り、経営再建策を受け入れなければならない事態になる。一方でトヨタはこのとき販売台数世界第一になります。もちろんトヨタもリーマンショックの影響を受けましたが、比較的早く立ち直りました。それはトヨタをはじめ日本の自動車が石油排出問題など、環境問題に以前から取り組んでいたからだと思います。たとえばリーマンショックが起こる前の数値でいうと、GM燃費がリッター当たり4.5キロほどで、一方トヨタは13.5キロほどでした。つまりGMの車はもうほとんど石油と排気ガスをまき散らすような車だったわけです。けれども経営不振に陥ったGMはそのあと急激な方針転換をして、なんとリッター当たり99キロのハイブリッド車というのを宣伝文句にしました。もちろんその後の方針の揺らぎはありますが…。ここで重要なことはGMかトヨタかという違いではなく、情報化／消費化社会がどんどん無限に拡大した結果として、われわれの社会は地球という大きな環境の有限性にぶつかってしまったということです。それこそが根本的な問題であり、直接には環境問題あるいは資源問題として立ち現れているということです。

KCI：それはまさに本書の第2章や、第3章にて指摘されていることですね。

見田：そうですね。なので『現代社会の理論』を出版して20年後という質問に戻ります

と、今から 4 年程前に僕の著作集を刊行したのですが、この本は『定本見田宗介著作集』(2011 年)の第 1 巻に収めました。刊行にあたって最新版を出そうと、まずは統計資料を 2010 年ごろまでのデータに更新しました。また先程のリーマンショックをはじめ資本主義の本質的な変化が生じたので、書き換えるところがあれば全部書き換えようと全文読み返しました。ですが結果としてほとんど書き換える必要はありませんでした。ただ、実は新書版(1996 年)と著作集版(2011 年)では 1 ヶ所だけ変更した部分があるのですが、それは著作集版の第 4 章のなかで「資源消費なき成長」の可能性と限界」という新たな節を設けたことです。これはなぜかというと、まずあの箇所では、アメリカの資源消費量のグラフを分析しています。グラフをみると消費と生産が無制限化した消費社会を迎えたことによって、資源消費量が急激に増加している。ところがオイルショックを経た 80 年代ごろから、グラフは凸凹の線を描いており、つまりアメリカの資源消費量がほとんど増えていないことがわかる。また日本の場合ではその傾向が顕著にあらわれており、生産物あたりの資源消費量の大幅な減少がみられます。つまり世界的に省エネが非常に上手くいったということですね。ところがデータを更新した著作集版をみると、残念ながら 95 年あたりからアメリカの資源消費量は再び急激な増加傾向にある。

僕はこのことから 2 つのことが言えると思います。まず少なくとも 80 年代の段階で資源消費量は抑制することができた。このことは大きく言えば情報化の力です。情報化の力によって生産コストを減らすことができ、相当環境問題の解決に貢献することができた。このことを新書版では記しています。けれどももうひとつ、その後のアメリカは過剰な成長を続けています。ですが現在の外部問題が示す通り、この傾向は永久には不可能だということです。つまりどこかで安定成長に転換しないとイケない。このことを著作集版では強調しています。

だから『現代社会の理論』の出版から 20 年が経ちましたけど、大きな論理はあのままでいいということですね。大きな論理とはつまり第 4 章の解決編にあたるのですが、いわば環境問題や資源問題という外部問題をどのようにして解決するのかということです。第 4 章の主張とはつまりこういうことです。現在の経済成長のかたちは、外部問題によって限界に達している。けれどもその経済成長し続ける情報化／消費化社会のなかで、真の消費化とよばれるもの、本当の情報化とよびうるものは実は永遠に続くものであり、また善いものであると。したがってわれわれは真の消費化、真の情報化を踏まえたうえで、外部問題を克服した安定成長の社会を実現し、人間の幸福な社会になればいい。もちろんそれはたんに原始時代に戻れとか、中世に戻れとかそういう話ではなく、むしろ現代の狭い情報化／消費化社会を越えて、原理としての消費そして本来の情報を実現される社会を構想

するということですね。

KCI: それはまさに先生が近年執筆された、論文「現代社会はどこに向かうのか」や「高原の見晴らしを切開くこと」のなかでロジスティック曲線を用いて示されている第3のステージといわれるものではないでしょうか (Fig.2)。

見田: 第3のステージ、あるいは安定平衡の時代。それは有限な資源をこれ以上壊さないで人間が幸福になる時代だと思います。そのなかでマテリアルを越えた情報によって付加価値が増殖し、人びとが消費する。地球環境は有限だけれども情報空間は無限ですから。だから現在のようなマテリアルをやたらに使い尽くす情報化／消費化社会ではないかたちで、もともとの意味である真の消費化や真の情報化というのが実現された社会が第3のステージだということですね。

外部問題の再内部化

KCI: ここからは、現在のファッションの出来事を交えながらお聞きできればと思います。まずひとつめの大きな質問としては、『現代社会の理論』では情報化／消費化社会の外部問題として、大きく区分すると、環境問題（エネルギー問題）と南北問題（貧困問題）という2つの事柄について言及されていたと思います。このことを近年のファッションの動向に即してみると、たびたび環境問題や労働問題のニュースが取り上げられています。たとえばインドネシアの繊維工場の染色排水によって河川が汚染されたという問題や、バングラデイッシュの縫製工場の劣悪な労働環境や低賃金が社会問題となっています。こうしたなかエシカル・ファッションという現象が登場し、互いの服を交換するイベントの開催や、デザイナーと支援プロジェクトが連携して貧困状態の人びとに仕事と収入を与えるバッグ製作、あるいは環境に優しいとされるオーガニックコットンなどの素材の使用など、さまざまな試みが見受けられます (Fig.3, 4)。

こうした取り組みは情報化／消費化社会の転回、あるいは第3のステージへの動きとして捉えることができると思います。ですがその一方でこうした取り組みも、ある種のファッション現象として消費されているともいえます。つまりそれは根本的な解決策というよりも、たんに外部問題を内部に取り込むアピール、あるいは内部システムが内部であり続けるために産出した擬似的な外部問題とも捉えられるかもしれません。このような現象はわれわれの考えのなかに浸透しているのか、それとも単純にファッションの一現象になってしまうのでしょうか。

見田：おっしゃることは非常によくわかります。今のことを概念的な言葉でいうと、再内部化ですね。それはまさに先程言われた、取り込まれるということです。ですがそのことについては、はっきりといえば、僕は再内部化されてもいいじゃないか、取り込まれてもいいじゃないかという考えですね。たとえばあまり具体的な例を思いつきにくいけれども、たまに貧しい国の人びとの労働を安い賃金で搾取しているということに対して、それをやめましょうといいながらもっと搾取を増やしてしまうとか、あるいは環境問題で環境汚染をやめましょうといいながら、もっと別の仕方で汚染してしまうといったケースがあるかもしれない。けれども、そういう行為は個別にその都度批判すればいいわけであって、環境問題などへの取り組みを宣伝して儲ける会社があっても、それは別に良いじゃないかと。逆にそういうことがあるとあって、シニカルになることの方が恐ろしいと思います。どうせ取り込まれるだけじゃないとか、どうせそれでまた儲けるやつがいるじゃないかとね、そういう言い方でせつかく出てきた新しいものを、シニカルに揶揄したり、批判することの方が僕は良くないと思っています。だからそれに乗っかる人がいてもいいし、それで何か儲ける人がいてもいい。むしろそれが社会的に格好良かったりする。つまり再内部化とか取り込まれるということ、まずは良いことだと腹構えすることのほうが僕は重要だと思います。さらに言えば、よくエシカル・ファッションなどが問題にしている低賃金労働といった問題は、ファッションやデザインが有る無しに関わらず、ある種の資本の論理として出てくるわけです。だから先程申し上げたファッションやデザインの本質とは、資源の浪費や貧しい国の搾取などといった問題とは関係なく、良いものが作れるということです。このことが非常に大事なことだと思います。

ファッションの内部問題、あるいはファッションの三寒四温

KCI：もうひとつは内部問題そのものに関わる事柄についてお聞きしたいと思います。インタビューの最初でファッションの全域化ということが指摘され、ファッションがまさに現代の情報化／消費化社会のキーワードであることを示されました。それは言い換えれば、本来の衣服としてのファッションが情報化／消費化社会の、あるいは第2のステージの典型的な事例だということの意味していると思います。ただこれまで先生が指摘されたように、現代の情報化／消費化社会は一見上手くいっているようだけれども、限界があり、それが環境問題や資源問題といった地球の有限性の問題でした。けれども、というよりも、まさにそれゆえに、マテリアルを消費しないかたちで付加価値を増大することができるフ

ファッションは重要であるということでした。ですが情報化／消費化社会またファッションには、もうひとつの側面として先程の GM のように、常にモードを回転させてモデルチェンジをして別のモノを生み出していかなければならないという問題があると思います。このときにファッションはどうしてもマテリアルな問題に直面してしまうと思います。そのように考えてみますと、たとえば近年のノームコア、エフォートレス、ミニマリストなどと呼ばれる、シンプルなファッションはこれまで新しさを求めて無限に更新してきたモードそのものを忌避しているようにも思えます。もちろんそれは「新しさなどない」という新しさ」ともいえるかもしれませんが、現在のファッション界はもはやそうした力を失いつつあるように思います。こうした現象は第3のステージへの転回として捉えられるのでしょうか。

見田：それは非常に大きな問題だと思いますね。いまのミニマルやノームコアというファッションは、僕は大変本質的な動きに繋がっていると思っています。具体的な経験に即して言うと、98年に僕は東大を定年退職して、そのあとの2008年までの10年間女子大に勤務することになりました。しかも女子大のファッションと深く関わる学科で、ファッションの社会学という講義を持っていました。そのなかで2000年代のある時期から、学生たちの感覚の変化をはっきりと感じましたね。非常にシンボリックに言えば、ある種の80年代的なごてごてしたファッションに対する学生たちの軽蔑感ですね。それは80年代から90年ぐらいまで羽振りがよかった年上の、ひと世代前の人たちに対する「バブリーなおばさんたち」という典型的な表現にあらわれていると思いますが、このころはバブリーなファッションに対して軽蔑感を抱く学生が多かったですね。だからそのなかでユニクロなどのシンプルな服がかっこいい、という感覚が広がってきて大きな潮目の変化を感じました。それが最近のノームコアなどに繋がってくると思います。もちろんたしかにある種のデジャヴ（既視感）というか、たとえば60年代末ぐらいのジーンズを穿いた素朴な格好にも似ているといえるかもしれません。

けれどもイメージ的に言えば歴史には、冬が終わって春が近づいたときの気候である三寒四温のような流れがある。暖かくなってまた寒くなる、その繰り返して小さな波があるけれども、大きな流れとしては結局春になる。そうした大きな流れと小さなサイクルという、2つの流れが歴史を考える場合には必要で、それを混同するといけないと思います。そしていまのミニマルやノームコアといったファッションは、僕は何十年とか100年という大きな流れで捉える必要があると思っています。20世紀全体はどんどん成長を続けた時代でしたが、徐々に安定平衡期に入る。そこで僕は大きな流れとして、素朴なものとか、ミニマルなものが人びとにより愛されて定着していくと思います。もちろん先程言ったよ

うに、三寒四温的な小さい変化があって、やっぱり豪華なものが良いという揺り戻しがあると思います。そしてまたシンプルなものが良いという動きを何回か繰り返す。けれどもやはり全体的な歴史の大きな流れとしては、シンプルなものや素朴なものへという方向に行くと思っています。それこそ先進国の洗練された若者ほど、豪華なものや華美なものが欲しいといった欲望を持たなくなっているわけだから、ますます大きな流れとしてはシンプルなものに向かうと思いますね。

このことは 20 世紀の他の文化や芸術のなかで大変重要な概念である、新しさということについても同様の問題がみられると思います。これは杉本博司さんの『SEASCAPES』の解説で論じたことでもあるのですが、近代とは常に新しいものが良いとする価値観で、だから 20 世紀までの芸術家は常に新しさを競っていたといえます。一番新しい芸術とは何か、新しい芸術とは何が新しいか、最も新しいものとはどういうものか、ということ常々問うてきたわけですね。俺のが一番新しいんだ、それはもう古いという感じで。このような新しさを追求した時代が 20 世紀の終わりまでであったわけです。けれどもそういうことを問うこと自体が古くなってきた。つまり俺のが新しいとか、こっちが新しいとか、そういう新しさを競うことそれ自体が古くなってきたわけです。するとこれは面白いことで、実は新しさのなかに「小さい新しさ」と「大きい新しさ」が存在するということになるんですね。だからそれは先程の三寒四温の話と同じように、2 つの新しさのコンセプトが 闘^めぎ合っているのだけれども、結果としてはもはや新しさを追わない時代が到来しつつあるということです。

ファッションとモード

KCI：大きな波と小さな波、そのなかで大きな波を見据えるということですね。お話を伺っていると、この 2 つの違いはファッションとモードの違いのようにも思えるのですが、そもそも両者はどのように異なるといえるのでしょうか。

見田：これも僕は実際にファッションの社会学の、最初の講義のイントロで話していたのですが、ここでモードとファッションはどう違うのかということについて考えてみたいと思います。日本語の様々な辞典を開いてみると、主として流行の初期の段階をモードといい、中期や後期の段階をファッションと書いている辞典があったりしますね。これについては僕は正確な定義ではないと思っているのですが、ただそのように思われていることに意味があるわけですね。すると僕らが服飾の歴史を考えると、たとえば 20 年代のフ

ファッションとか30年代のファッションという言い方をしますが、一方で20年代のモードとか30年代のモードという言い方は出来ないこともありませんがあまり使わないと思います。つまり過去から現在にかけての現象については、普通はファッションという言葉を用いる。一方現在から未来のことについては、今年の秋のモードといったように、どちらかといえばモードという言葉を選ぶことが多い。

ここにファッションとモードの本質的な違いがあらわれていると思います。つまりモードとはある種「規範性の概念」であり、一方ファッションとは「事実性の概念」だということです。たとえばパリの流行をつくるような人たちのパリコレクションなどで新しいコレクションが発表されると、それは今シーズンのモードとして出てくる。そして実際にその服を着た人がニューヨークの5番街を埋め尽くしたときに、はじめてファッションとなるわけです。したがってモードとファッションの違いというのは、初期や中期という話ではなく、「規範性の概念」か「事実上の概念」か、という違いだと思います。

さらに面白いのは、モードという言葉はフランス語ですよね。一方ファッションは英語ですね。だからロラン・バルトの『モードの体系』でもどうしてもファッションのことを言いたいときには、「事実上のモード」や「現実のモード」という言い方をしているわけですね。そしてこのファッションとモードという言葉の違いは、フランス語と英語の言語の違いというだけではなく、パリとニューヨークという都市の位置とも関係していると思います。現代都市のある種の2つの中心として、パリとニューヨークあるいはフランスとアメリカという違いがある。現実的な力を持っているのは、何と言ってもアメリカ、そしてニューヨークですね。一方フランスないしパリは、最近はそうでもないですが、それでも憧れの中心とされる。このことは『20世紀のモード』のデュ・ロゼルも述べていることですが、そこでパリという都市は「モードの地」と言われることは多いのですが、「ファッションの地」と表現されることはあまりないですね。それはやはりパリが、規範性としての「モードの地」だということです。そしてその憧れの都市としてのパリが力を失っているということは、まさに規範性としてのモード、あるいはファッションのトリクルダウンという傾向が失われていく、ファッションの歴史の大きな流れだといえます。

ファッションの未来

KCI: そのときファッションの未来は、どのような方向に向かっていくと考えられるでしょうか。

見田：ひとつ思うのは、いわゆるポストモダンという言葉がありますね。僕はあの言葉には2つの意味があって、たんに近代の最先端という意味と、近代のかなたという意味があると思います。ポストモダンという言葉がそもそも使われたのは建築の領域ですよ。京都駅を設計した原広司さんと、70年代の若いころと一緒にニューヨークを歩いたことがあったんだけど、彼は建築の人だから5番街やブロードウェイをみていると、大体何年ごろの建築なのかってすぐにわかるんですね。そのときわかりやすく僕に教えてくれたのは、表面がつるんとしているほど、あるいはシンプルほど新しいということでした。その後僕はメキシコに行ったんだけど、そのなかのポランコという地域では当時最先端のビルが数多く建っていました。とくにあのような国では急に最先端のビルが建てられることが多いんですね。そこでは何十階という国連本部のようなビルで、窓が非常につるんとしたガラス板1枚のようなビルが建てられていて、これはいわばモダンの最終型ですね。ところが僕がもっとも驚いたのは、まさにポストモダン建築とよばれるもので、それはつるんとしたガラス板の数十階建てのビルなのですが、そのビルの途中から木が生えているんですね。それがどのように植えられているのかはわからないけれども、生の木が生えていて成長するように見えるわけです。モダンの最先端と最も古代以前の生物的なものが共存している、ある意味ではポストモダンの象徴だといえると思います。もちろんそれは今ではよくあることですがけれども。

こうした動きはファッションについてもいえます。つまり、「60年代ファッション」、「70年代ファッション」、「80年代ファッション」というのは、それぞれに明確なイメージがあったわけです。でも90年代ファッションってなかなか言わないですよ。まして2000年代ファッションとはほとんど言わない。そしてそれはよく言われているように、引用の時代になっていく。ということはディアクロニック（通時性）がサンクロニック（共時性）になるわけです。つまり通時の共時化ですね。歴史的に垂直に来たものが、原始的、古代的、中世的、バロック、ロココ、モダンとかそういう全てのものが、横並びになって自由自在に引用できる。それはいわばポストモダンの典型的な風景ですね。そこに自由さがあるわけで、先程の話と繋がってきますが、やたらに新しい、新しいと言っていた時代は、いわば新しさに追われた窮屈な時代だったわけで、けれども現在はそうした新しさという呪縛から解放されてもっと自由になっているわけですね。それがサンクロニック（共時的）という状態にあらわれている。ファッションは、そして他の文化も、このようにどんどん古いもの、中ぐらいのもの、新しいものを自由自在に組み合わせる方向に向かっていくと思いますね。

KCI：歴史の共時化。こうした状況のなかでファッションをはじめ、さまざまな文化をど

のように研究し、分析し、記述することができるのか。それは私たちに課せられた、大きな課題であるように思えます。本日はありがとうございました。

(聞き手：石関亮、小形道正)

〈図版〉

- Fig. 1. 見田宗介の著作 個人蔵
Books by Munesuke Mita. Private collection.
- Fig. 2. 人類のロジスティック曲線
The logistic curve of human race.
- Fig. 3. イオンリテール株式会社《イオン オーガニックコットン プロダクツ》 2016年(企業広告)
画像提供：イオンリテール株式会社
AEON RETAIL Co., Ltd., corporate advertisement, "AEON organic cotton products" 2016.
Courtesy of company.
- Fig. 3. 古着の倉庫 佐藤生実撮影
The old-clothes warehouse. Photo by Umi Sato.

見田宗介 (Munesuke MITA)

1937年、東京都生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。東京大学名誉教授。専門は現代社会論、比較社会学、文化の社会学。主な著作に『定本見田宗介著作集』I-X(岩波書店、2011-2年、毎日出版文化賞)、『定本真木悠介著作集』I-IV(岩波書店、2012-3年)など。近著に「現代社会はどこに向かうか(2015年版)」(『現代思想』総特集：見田宗介＝真木悠介43巻19号、2015年)、「走れメロス」(『現代思想』44巻17号、2016年)など。

(※肩書は掲載時のものです)